

ヴェーバー『理解社会学論』の執筆事情とその定位 —リッケルト宛書簡を手がかりとして—

Hintergrund und Stellung des Aufsatzes „Über einige Kategorien der
verstehenden Soziologie“ von Max Weber
— Mit der Untersuchung seiner Briefe an Heinrich Rickert —

野 崎 敏 郎

要 旨

ヴェーバーの『理解社会学論』を『経済と社会』旧稿のためのカテゴリー論として位置づけるのが適切であるか否かにかんしては論争がある。折原浩は、この両者の整合性を論証したが、『理解社会学論』の執筆事情については見過ごされていることがある。それは、この論文が、社会政策学会への「意見書」の補完物として急拵えで作成されたという事情である。そこで本稿では、「意見書」と『理解社会学論』とが密接に関係づけられていることを、リッケルト宛書簡に依拠して証明する。また、後者を執筆したことと社会政策学会討論会とをきっかけとして、『経済と社会』の構想とその刊行の段取りとに変更が生じ、ヴェーバーが、『世界経済の宗教倫理』を先に執筆する必要性を感じたため、1914年から1919年まで、長期にわたって『経済と社会』の執筆に空白が生じたことを指摘する。

キーワード：マックス・ヴェーバー、『経済と社会』、理解社会学、社会政策学会、価値判断論争

I 問題の所在

マックス・ヴェーバーは、J・C・B・モール社から講座『社会経済学綱要』の編纂を依頼され、この大講座の構成案を練るとともに、自分の担当巻の草稿を、1909/10年頃から1914年にかけて書きすすめた。これが、いわゆる『経済と社会』旧稿（以下「旧稿」と略記）である。この執筆活動は、外的には第一次世界大戦勃発という偶発的事件によって、また内的にはおそらく彼自身の著作構想の再考のために長く中断され、本格的にそれが再開されるのは、ようやく1919年頃のことである。そしてその改訂・加筆過程で、彼は、カテゴリー構成に重要な変更を加え

ており、また担当巻の構成そのものにも変更を加えようとした。

彼は、この作業を翌年にかけてすすめ、その一部分を、彼の死（1920年6月14日）の直前期に仕上げ、印刷に付した。これが、『経済と社会』第一部として知られている部分（以下「新稿」と略記）である。新稿は、翌1921年に『経済と社会』第一分冊として刊行された。彼自身は、残る原稿の加筆・改訂を遂げないまま急死したので、マリアンネ・ヴェーバー夫人は、遺された原稿（旧稿）を、メルヒオール・パリュエの協力を得て編纂し、刊行した。

このとき刊行された旧稿は、1914年以前の姿のままであるため、新稿と旧稿とのあいだで

多々齟齬を^{きた}来しており¹⁾、このことが、今日この巨大な「未完のトルソ」をわれわれが読解・撰取するのに大きな妨げとなっている。

『日独ヴェーバー論争』（折原浩 2013）は、この未完のトルソを正確に読解するために折原浩がすすめてきた作品史研究の進化形を記した労作である。折原はとくに、この作品にかんするモムゼン、シュルフターらの見解を点検し、文献学的見地から批判的検討を加え、旧稿から新稿への移行過程を詳細に辿っている。

筆者は、折原のこの著作から学ぶなかで、そこにいくつか留保すべき点が含まれていることに気づき、2014年夏と2015年夏に渡独したさい、この問題にかかわる史料調査を実施し、その結果、折原説に修正を加える必要があると判断するにいたった。本稿は、『経済と社会』の成立にかかわる重要事実を提示し、この著作と、論文『理解社会学のいくつかのカテゴリーについて』²⁾（以下『理解社会学論』と略記）との関連づけをなすとともに、『理解社会学論』の執筆・公刊事情を明らかにすることを目的としている。『経済と社会』成立史の全容の解明は、依然として未決の重要な研究課題だが、その解明のためのひとつの重要な局面について、正確な事実認定を促したい。

II 『理解社会学論』の位置づけ——四通のリッケルト宛書簡からみえてくるもの——

『理解社会学論』と『経済と社会』旧稿

折原は、『ロゴス』第4巻第3号（1913年11月刊）に掲載された論文『理解社会学論』の意義について、モムゼン、シュルフターらの解釈にたいする批判のかたちをとって、立ちいった考証を展開している。詳細は省くが、本稿における考証課題にとって重要なのは、モムゼンもシュルフターも（それぞれ別様の理由づけをもって）、この論文と、その元となった『経済

と社会』旧稿とのあいだに差異があるとみなし、この論文を、旧稿の基礎づけをなすカテゴリー論（の一部）として認めようとしなかったのにたいして、折原が、周到的批判を展開し、この論文と旧稿との整合性を論証したことであり、これはわれわれ日本の読者を裨益するに十分である。

折原の立論を読むと、ヴェーバーの学的営為にとって、また『経済と社会』ないし『経済と社会秩序・社会勢力』という著作を理解するために、1909～14年という時期のもつ重要性がわかる。また、この大作を理解するさいに、『理解社会学論』の位置づけとその読解が重要な鍵を握っていることもわかる。

『理解社会学論』を執筆した頃、ヴェーバーは、ハインリヒ・リッケルトに宛てていくつか書簡を書いており、とくに1913年2月7日付、7月3日付、7月3日以降、9月5日付の四通のリッケルト宛書簡が、この論文の執筆動機を知るために、また『経済と社会』の1913年頃における構想がどのようなものだったのかを考証するために、重要な手がかりを与えてくれる。まず、この四通のなかの関連箇所を以下に訳出し、考証しよう。

リッケルト宛書簡①（1913年2月7日付）抜粋（GStAPK/MW25: 74f., MWGII/8: 84f.）

社会政策学会は、この秋に、それ固有の（〔つまり〕経済学的・社会学的）分野のために、また歴史と哲学のためにも、下記の諸問題を非公開のうちに討議する予定だ³⁾。

1. 倫理的価値判断の定立
2. さまざまな発展傾向と、さまざまな実践的価値選択⁴⁾との関係
3. 経済政策の目標と社会政策の目標との関連
4. 一般的方法論的諸原則と授業の特殊な課題との関係

要するに、

- 1) 価値選択、および対象限定としての価値関係、

——〔つまり〕（倫理的であれ他のかたちのものであれ）実践的価値選択——，3）いわゆる「発展史的必然性」，（第二）科学および授業における「進化論的価値選択」（原注），〔この三つのことが，〕

a) 経験的諸分野において

b) 哲学（および法学）において

〔どうなっているか，またどうあるべきかということだ。〕

討論を準備する関係上，命題のかたちで明文化された簡潔な定式化が求められており，そのさい，この定式化は，おおよそ（せいぜい）二～三ボーゲン⁵⁾で印刷されるよう配分を指示されている（原稿提出〔締切〕は4月1日）のだが，もしも関係者の要望があるなら，さらに加えてまとまった『覚書集』〔になるかもしれない〕。

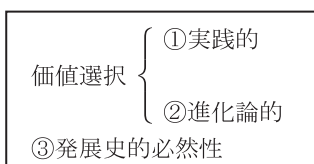
（原注）この戯言が，どれほどいつもいつも定式化されていることか！

リッケルト宛書簡①の含意

ヴェーバーは，この書簡を書いていて，ひとつミスをしている。それは，①実践的価値選択と②進化論的価値選択と③発展史的必然性との三つを並べて書こうとして，うっかり②を抜かしてしまったことである。そこで，③を書いたあと，丸カッコつきで「（第二）」と断り，②を追記したのである。

おそらく彼は，このとき，なにかのメモを傍らに置いていて，それをみながらこの書簡を書いていたのであろう。そのメモを復元してみると，**図1**のようなものだったと推定できる。

図1 概念図メモ（推定）



ヴェーバーは，これをみて，①「実践的価値選択」の次に③「発展史的必然性」を書いてしまったのだが，②を抜かしたことにすぐ気づき，③の次に「（第二）」と注記して②「進化論的価値選択」を追加したのであろう。

ところが，『マックス・ヴェーバー全集』書簡編の編集者は，この書き損じによる順序の入れ替わりを把握しそこなっており，驚いたことに，この箇所を次のように改竄してしまった（MWGII/8: 84）。

1) 価値選択，および対象限定としての価値関係，——2)（倫理的であれ他のかたちのものであれ）実践的価値選択——，3）いわゆる「発展史的必然性」，（第二）科学および授業における「進化論的価値選択」

このように，「2）」が不当にねじこまれてしまったため，まず，〈価値選択・価値関係〉と〈実践的価値選択〉とが並列関係に置かれてしまい，あたかもこの両者が異なる事項であるかのように見える——実際には，後者は前者のたんなる言い換えである——。また，この改竄の結果，ここに書かれている「（第二）」がなんにたいする「第二」なのか，「第一」に当たるのがなにかがわからなくなり，宙に浮いてしまっている。

『全集』のこの箇所を読む者は，〈価値選択・価値関係〉と〈実践的価値選択〉との区別がわからず，また「（第二）」の意味するところがわからず，ひどく困惑するにちがいない（現に，現物を閲読する前の筆者がそうであった）。『全集』のこの箇所には脚注もなにもなく，あたかもヴェーバーがもともとここに「2）」と書いていたかのように装われている。しかし，この書簡の現物をチェックしたところ，この「2）」の箇所にはなにも書かれていないことが判明したのである（GStAPK/MW25: 74b）。

リッケルト宛書簡①の意義

社会政策学会のなかには、社会科学と価値判断にかんする見解の相違が存在し、それは、1905年9月のマンハイム大会において、シュモラーとヴェーバーとの対立として顕在化する。1909年のヴィーン大会でもまたこの問題が立ち上って議論されたが、つねに実践的課題を担っているこの学会の性格から考えて、大会のたびに方法論の問題が蒸しかえされるのは不都合であることから、大会からは切りはなして、この問題にかんする特別な討論会が企画される(野崎敏郎 2011: 233-241頁)。ここにみているリッケルト宛書簡①には、その討論会に向けて意欲的に取りくんでいるヴェーバーの姿が活写されている。

ヴェーバーは、社会政策学会にたいして根本的な問題提起をなす「意見書」(Baumgarten 1964: 102-139, Nau 1996: 147-186)を執筆することに決め、4月1日の締切に向けてこの仕事に集中するのだが、結局この締切には間に合わず、大幅に遅れる。それは、「意見書」が、おそらく学会から指定された「二~三ボーゲン」の分量に収まらず、大きなものに膨れあがりそうになったからであり、しかも、他の学会員の寄稿にくらべて、自分の原稿だけが大きなものになってしまうことも懸念される⁶⁾。しかし無理に短縮化を図ると、討論会資料として十分なものにはなりそうにない。またそれとともに、『社会経済学綱要』の基礎づけに、シュモラーとの論争から得られた論点を反映させる必要を感じたのかもしれない。そこで彼は、「意見書」とは別に、社会科学における「理解」の方法論にかんする論稿を(『綱要』の原稿を流用して)急遽——討論会の前に——公表することを思いつき、媒体を『ロゴス』誌に決める。これが『理解社会学論』である。次の三通の書簡の関連箇所を読もう。

リッケルト宛書簡② (1913年7月3日付) 抜粋 (MWGII/8: 260)

今日、僕は、クローナー博士宛に下記の旨の書簡を送る。

- 1) 『ロゴス』のひとつの号に、拙稿『理解社会学の方法論に寄せて (Zur Methodik der verstehenden Soziologie)』の掲載スペースを設けることを希望する(比較的短い論文で、分量は1½ボーゲンと見積もっている)。
- 2) しかし、もしも、拙稿を割りこませたせいで、フリードリヒ・アルフレート・シュミートの論文の掲載に妨げが生じるならば、拙稿を掲載しないこと。シュミートはたいへんな窮状に置かれているので、彼が必要とするスペースを僕が要求して取りあげるなどという責任を負うことはできそうにない。というのは、こちらのほうの〔=シュミートのほうの〕事情が優先するからで、僕は、『ロゴス』がだめなら]ほかのところに——場合によっては『社会科学・社会政策論叢』に——掲載スペースをみつける。シュミートの論文の採録を可能にするよう取りはからってくれたまえ。

リッケルト宛書簡③ (1913年7月3日以降) 抜粋 (MWGII/8: 261)

僕の論文は、編集部が望む時期に印刷できる。いかなる場合でも拙稿がシュミートの論文の掲載を妨げてはならない。そんなことになるのであれば、ひどく心が痛むことだろう。

原稿は、いくらか修正の後、請求におうじて、いずれにせよ8日以内には送付できる。

リッケルト宛書簡④ (1913年9月5日付) 抜粋 (GStAPK/MW25: 78f., MWGII/8: 318-320)

下記のように、博士クローナー氏に宛てて、彼が戻ってくる期日(9月15日)に合わせて、例の論文〔=『理解社会学論』〕を送る[つもりだ]。この論文は仕上がっていて、その元来の部分(sein ursprünglicher Teil)は、す

でに四分の三年ほど前に (seit ¾ Jahren) [仕上がっており], このところ (jetzt) これを校閲し (durchsehen), また, 徹底的な「極小化 (Minimisierung)」の配慮の下に, いくらかの「方法論的」注解 („methodische“ Bemerkungen) をこの前に置いたんだが (einleiten), 全体はまったくもって論理的な性格の小論だ。目下クローナー博士に宛てて書簡を書いていて, そこでは次のように書いている。この論文は, おそらく予想されたものよりもいくらか長い——たしか以前「約1½ ポーゲン」と書いたと思う——ので, 学兄 [=クローナー] には, これを①受理しないか, あるいは②いずれ後の号になってから印刷するか, ③元来の部分だけを印刷するか (原注), ④二つの論文 [=上下編] として, ある部分はこの号に, 残りの部分はいずれ後の号に刊行するか, このいずれかにしてもらいたく (この論文は, タイプ打ち原稿で, 51頁から, 最大に見積もって53頁ある。幅があるのは, 削除と加筆があるため)⁷⁾, この原稿は一頁あたり540~550語だから, (一頁あたり720~730語の)『ロゴス』に換算すると, 最大でちょうど40頁になる⁸⁾。「著者」の考えからすると, この論文はじゃじゃ馬に類するものだが, 自分自身共同編集者として, 僕なら, [この論文にかんして] ぜんぜん手こずることはないだろう。客観的にみて, [この論文の] 全編の刊行それ自体は都合がよく (wohl), またこの時期に——「価値判断」にかんする社会政策学会上の詳解の前に——なすのが適切だろう。しかし, [クローナーによってどのように処断されようと, その] 決定に, いかなる場合でも気分を害したりはしない。このことを, やはり君からもクローナー氏に明言しておいてくれ⁹⁾。というのは, あの当時私自身がなしたいくつかの指示内容を遵守しなくてはならないからだ¹⁰⁾。いかなる場合でも, フリードリヒ・アルフレート・シュミートあるいは愚妻の論文を引っこめさせるようなことをしてはならない。そんなことは起きない。——

(原注) 元来の部分 [だけ] となると, いくらかむずかしくはなるが, それでもまあなんとか (auch) 納得できることで, もしもこれだけを刊行することになると, 章番号といくつかの文言だけは変更しなくてはならない。

リッケルト宛書簡②③④の含意

折原は, 書簡④のなかで „¾ Jahre“ (seit ¾ Jahren) と書かれている箇所について, これは „¾ Jahre“ (四分の三年 = 九カ月) を指すのではなく, „3-4 Jahre“ (三~四年) だと解している (折原浩 2013: 40-42頁)。

重要な問題なので, 筆者は, 2014年8月に, プロイセン文化財枢密公文書館(ベルリン・ダーレム)に所蔵されているこの書簡の現物を調査した (GStAPK/MW25: 78f.)。複数の数字をつないで「◎から◎まで」という意味をしめすとき, ヴェーバーはつねに横棒 (Bindestrich ととも Gedankenstrich と異なるので, 「横棒」としておく) を用いている。筆者が, この原書簡を点検したところ, 当該箇所 で用いられているのは, たしかにスラッシュであった。„3-4 Jahre“ではなく „¾ Jahre“ である。当該書簡中の他の箇所でも数字をつなぐ横棒が用いられており, それと比較対照しても, やはりスラッシュにまちがいない。『全集』編集者の判読結果は正確であり, 折原説は成り立たないことが判明した。

それでは, この「四分の三年 = 九カ月」をどう解釈すべきなのかが問題である。まず, この書簡中で「その元来の部分 (sein ursprünglicher Teil)」と呼ばれているのは, やはり1909/10年頃から書きためられてきた元原稿を指すと解するのが至当である。これはタイプ打ち原稿とされているから, マリアンネ夫人が, 夫の読みづらい文字を判読しながら作成したと思われる。そこで推定されるのは, リッケルト宛書簡④が書かれた1913年9月5日から九カ月さかのぼった1912年末~1913年初頭に, 『経済と社会』

のうち、方法論的基礎論に相当する部分（これが元原稿である）およびその他の部分がひとまず書きあげられ、その時点から、マリアンネ夫人がタイプ打ち原稿を作成しはじめ、そこにヴェーバーが肉筆でさらに加筆していったという事態である。そして注意すべきは、この元原稿は、『理解社会学論』中に流用された三つの章（第Ⅴ～Ⅶ章）だけではないということである。抜きだされた三つの章は、タイプ打ち原稿で約34～35頁¹¹⁾の分量だが、『経済と社会』のための方法論的基礎論全体（1912年末～1913年初頭に完成した元原稿）が、どの程度の分量をもつものだったのか——流用された三つの章が方法論的基礎論の大半を占めていたのか、それとも他のさまざまな記述が加わったはるかに大規模なものだったのか——は速断できない。九カ月間、マリアンネ夫人がタイプ原稿を作成し、一方ヴェーバーは、社会政策学会への「意見書」を書きすすめながら、夫人が日々すこしずつ仕上げ提供するタイプ原稿をそのつど「校閲（durchsehen）」したのであろう。

彼は、『ロゴス』誌に掲載するため、この原稿に、肉筆で「方法論的注解（methodische Bemerkungen）」を書き入れた（Weber 1913: 253）。書き入れられたのは„Bemerkungen“であって、„Anmerkungen“ではないから、脚注ではなく、本体への「前置き」——本体だけでは論文の体裁にならないので、そこに付した前説——だと考えるのが自然である。したがって、新たに書きくわえられた„Bemerkungen“は、『理解社会学論』の第Ⅰ～Ⅳ章（第一部の三つの章と、第二部の最初の章）のことだと思われる。ところが、これによって論文が長くなってしまったため、この雑誌の紙幅の都合で削らなくてはならない可能性をヴェーバーは心配している。そこで、この書簡の欄外注に記されているように、この„Bemerkungen“を省き、元原稿のまま（つまり第Ⅴ～Ⅶ章のみを）掲載することを検討している。その場合、章番号と「いくつかの文

言（einige Worte）」を変更する必要がある。

実際、初出誌に掲載されている他の論稿と比較すると、『ロゴス』第Ⅳ巻に収録されている16本の論文のなかで、『理解社会学論』（42頁分）は、ジンメルの論文（44頁分）に次いで長いものである。参考までに、トレルチは28頁分、リッケルトは33頁分である。マリアンネ・ヴェーバーの論文（三番目に長い36頁分）と併せて考えると、ジンメル以外の執筆者たちが30頁内外で収めているのに、自分たち夫婦で78頁も占めるのは気が引けたのであろう。そこでヴェーバーは、新たに書きたした箇所を省くことを考慮したのである。ということは、書きたした部分を省いても意味内容上の支障はなく、むしろ、書きたした箇所は、元原稿との整合性をもたせつつ雑誌論文の体裁を整えようと配慮したものだと思われるのが至当である。ここから、1909/10年頃から書きためられてきた元原稿と、1913年の雑誌向けの「書き入れ」とのあいだで、使用カテゴリーの変更のような重要で本質的な異同が生じていないと判断できる。

この書簡のなかで、元原稿を「このところ校閲している（durchgesehen）」と表現されていることも重要である。「手を加える」「書きなおす」という意味なら„bearbeiten“を使うはずで、„durchsehen“なら、せいぜい誤記の訂正と、文章表現がわかりづらい箇所のわずかな手直し程度であり、極限まで拡大解釈しても、論述を見通しのいいものにして、わかりづらい箇所や読者が解釈に迷いそうな箇所に《道案内》を付すという程度にとどまる。この点から言っても、このとき元原稿にたいして根本的な書き替えはおこなわれなかったと判定できる。

「意見書」と『理解社会学論』との関連

「意見書」と『理解社会学論』との関連については、精密な比較対照が必要だが、紙幅の関係で、ここでは二点示唆するにとどめる。第一に、『理解社会学論』においては、理念型構築

そのものが、そもそも研究を導くさまざまな価値関係に依存していることが強調されている(Weber 1913: 259, 263)。第二に、社会学的考察は、ある表象について、その法学的な正しさに照らしてではなく、もっぱら行為論的な観点から取りあつかうことも強調されている(ebd.: 264f)。『ロゴス』誌のために追加された章におけるこうした論述は、明らかに、来たるべき社会政策学会討論会における価値判断討議にたいする明確な論点提示をなしている。一方、「意見書」の末尾には、「合理的なもの^①と経験的なものとのさら^②に^③くわ^④しい諸関係の巨大な結合連関(Komplikation)」について、意見書と「同時期に刊行される」『理解社会学論』を参照せよと指示されているのである(Baumgarten 1964: 139, Nau 1996: 186)。

『意見書』と『理解社会学論』にかんする一連の事実経過

以上の考証結果を整理してみよう。

1912年11月に、社会政策学会において、社会科学と価値判断にかんする討論会が開催されることが決定され、学会員にたいして、その討論のための意見を書面で表明することが求められる¹²⁾。ヴェーバーは、これを受けて、1913年4月1日の締切に向けて「意見書」を書く。リッケルト宛書簡①が書かれた2月7日は、この「意見書」に取りくんでいる最中である。しかし締切には間に合わず、これを彼が書きあげて学会事務担当者に送付したのは8月14日であった(MWGII/8: 311)。そして1914年1月5日に開かれた討論会には、たしかにヴェーバー他による『意見集』が供されている(Nau 1996)。

このことから、いくつかの重要な事実が浮かびあがってくる。まず、社会政策学会における討論のための「意見書」が思いのほか大きなものになり、締切に間に合わず、印刷に付して討論会に間に合わせることのできるギリギリの局面(8月中旬)になってようやく脱稿する。し

かもこの「意見書」だけでは不十分で、「意見書」を補完・補強するために別論文公表の必要をつよく感じたヴェーバーは、「意見書」を書きおえる前の7月3日にリッケルト宛書簡②を書き、『理解社会学の方法論に寄せて』(仮題)を『ロゴス』誌に掲載するようクローナーに依頼することを告げる。この論文は、旧稿から流用した三つの章に「頭」(方法論的注解)をつけて論文としての体裁を調えることによって、尋常でないほど短期間のうちに完成され、リッケルト宛書簡④が書かれた9月5日には、『理解社会学のいくつかのカテゴリーについて』と改題された論文がすでに仕上がっている。そしてクローナーは、9月15日頃にヴェーバーから送られてきた論文を、削減も上下分割もせず、そのまま『ロゴス』第4巻第3号に掲載する。この号は1913年11月に刊行されており、ヴェーバーの希望通り、社会政策学会の討論会に先立って公表に漕ぎつけることができた。このときヴェーバーが、——『ロゴス』編集者や同誌の他の執筆者たちに迷惑をかけることを気にしつつも——社会政策学会の討論会に間に合わせるために『理解社会学論』の掲載・公表を急いだことは明らかである。現に、リッケルト宛書簡④のなかで、彼自身が、この論文を、「『価値判断』にかんする社会政策学会上の詳解の前に」刊行するのが適切だと書いている。『理解社会学論』は、このように、「意見書」を補完・補強する位置づけを与えられ、急拵えでまとめられた論文なのである。折原も中野敏男も、『理解社会学論』のこうした特殊な執筆動機を見過ごしており、そのため、なぜこの時期に旧稿の一部が抜きだされ、論文の体裁をとって刊行されたのかを説明できていない(中野敏男 1990, 折原浩 2013)。

『理解社会学論』脚注の解釈について

『ロゴス』掲載時に『理解社会学論』に付せられた脚注には次のように書かれている。「こ

の論文の後半部分は、すでにずいぶん前に書いておいた詳論から抜きだした断章であり、この詳論は、事実関係にかんするさまざまな研究の方法論的基礎に、なかでもまもなく刊行される叢書のための〔私の〕担当巻（『経済と社会』）の方法論的基礎に供される手筈になっていた。この詳論の他の部分は、たぶん別の機会に適宜出版されるだろう（Der zweite Teil des Aufsatzes ist ein Fragment aus einer schon vor längerer Zeit geschriebenen Darlegung, welche der methodischen Begründung sachlicher Untersuchungen, darunter eines Beitrags (Wirtschaft und Gesellschaft) für ein demnächst erscheinendes Sammelwerk dienen sollte und von welcher andre Teile wohl anderweit gelegentlich publiziert werden）」（Weber 1913: 253）。

このなかの „vor längerer Zeit“ は、常識でみて、たった九カ月前のことだとは考えにくい。ずいぶん前に書いたまま放置されていたものを、ひさしぶりに取りだしたという含意である。既述のように、1909/10年頃から書きはじめられた旧稿は、1912年末～1913年初頭にひとまず（未完成の部分が残ってはいるものの）書きあげられた。そのとき、『理解社会学論』に流用された方法論的基礎論は、比較的初期に（たとえば1909/10年頃に）すでに書きあげられていたと推定される。だから、その部分は「ずいぶん前に書いておいた」ものなのである。そして1912年末～1913年初頭（「九カ月前」）から、その方法論的基礎論と、旧稿の他の部分とを、マリアンネ夫人がタイプライターで筆写しはじめ、それをヴェーバーが校閲し（durchsehen）、またそこに加筆していったのであろう。

„Der zweite Teil des Aufsatzes“ は、文章の流れからみて、第Ⅴ～Ⅶ章を指すものと思われる。つまり、『理解社会学論』の三分の二ほどの分量を占める第Ⅴ～Ⅶ章が、この論文の第二番目の部分とみなされているのである。この „der zweite Teil des Aufsatzes“ を、折原は、中野

と同様に、〈（二部から成る）この論文の第二部〉つまり第Ⅳ～Ⅶ章と解しているが（中野敏男 1990: 151頁、折原浩 2013: 39頁）、筆者は反対である。そうではなく、「この論文の後半部分」と解する。つまり、この論文を内容上二つに区分し、その第二部のことを指しているのではなく、〈数年来執筆されてきた元原稿から抜きだされた三つの章〉を指すものと解する¹³⁾。この三つの章は、あくまでも『経済と社会』の方法論的基礎づけをなした論述のなかから抜きだされた（aus）断章（ein Fragment）なのであって、この三つの章だけが——また『理解社会学論』に記述された内容だけが——『経済と社会』の方法論的基礎づけをなすのではない。この三章を含む方法論的論述全体はその後失われたが、どのようなものだったのかを推察する手ごかりはある。以下に考証しよう。

Ⅲ 『経済と社会』旧稿群の韜晦事情

『理解社会学論』は、ヴェーバーが1909/10年に降に書き、1912年末～1913年初頭頃からマリアンネ夫人がタイプ打ちしていった方法論的基礎論のなかから一部分を抜きだし、これを第Ⅴ～Ⅶ章に充て、1913年に第Ⅰ～Ⅳ章（『ロゴス』誌のための新稿）を付加した《接ぎ木細工》である。この論文は「意見書」の補完物だが、前記の脚注の記述から判断すると、彼は、他の部分も、適宜『ロゴス』か別の媒体に公表するつもりだったようである。そして、ゆくゆくは、『理解社会学論』中に流用した三つの章を含む方法論的基礎論と、他のカテゴリー論とをもってひとつの分冊とし、さらに他の部分（つまり各論）は別の分冊とするつもりだったと思われる。この予定されていたカテゴリー論分冊は、1920年に彼が没する直前に『経済と社会』の第一分冊として仕上げられ、翌年刊行されたものの原型であろう。

1909/10～14年の旧稿群のうち、法・支配等々

の論述は、別のいくつかの分冊（かりに『個別領域』巻と呼んでおく）となるはずで、これにたいする方法論的基礎づけは、ひとつの分冊（後年の新稿に倣って、ひとまず『社会学のカテゴリー論』巻と呼んでおく）として構想されていたのであろう。そして問題は、1914年までの段階で、『社会学のカテゴリー論』巻の旧稿群がどの程度仕上がっていたのかについて、われわれにその資料が遺されていないことである。

ヴェーバーは、1920年に、『社会学のカテゴリー論』巻の新稿と、『宗教社会学論集第一巻』とを仕上げて印刷所に回している。後者もすでに完成していたことは、『全集』収録資料からも明らかである。また筆者は、2013年9月に、バイエルン州立図書館手稿室で、わずかに遺されている『宗教社会学論集第一巻』のゲラの一部を閲覧した。それは、『第一巻』の末尾に置かれている「中間考察」のゲラに加筆した形跡をしめすものである。巻末の論稿にかんじて、すでにゲラ段階（付帯状況から、二校以降の段階）に差ししかかっていたのであり、この加筆は1920年5月末（死の直前）になされたものと推定されている。『宗教社会学論集第一巻』は、ヴェーバー自身が完成させた著作であって、マリアンネ夫人によって遺稿が整理されて刊行された『第二巻』『第三巻』とは異なる（野崎敏郎 2016: 372-373, 409-410頁）。

この『宗教社会学論集第一巻』の改訂・加筆・仕上げは、1919年6月にはすでに開始されており、それと並行して、ヴェーバーは、ミュンヘン大学夏学期講義「社会学のもっとも一般的なカテゴリー」に依拠して、『社会学のカテゴリー論』巻を新たに起稿している（1919年6月28日付、7月5日付宛書簡、MWGII/10: 667, 675）。さらに9月から10月にかけて、『経済と社会』旧稿を改作して『社会学のカテゴリー論』巻をまとめる作業をすすめている（9月25日付、10月27日付パウル・ジーベック宛書簡、ebd.: 789, 826）。そして彼は、この『社会学のカテゴリー

論』巻の新稿を、『経済と社会』第一分冊として仕上げた（原書180頁まで）。このとき彼は、1909/10~14年の旧稿群（草稿）に直接書きこんでこの第一分冊を書いたのであろう。そのため、これに対応する旧稿中の方法論やカテゴリーにかんする草稿群（『社会学のカテゴリー論』巻の旧稿）は、新稿のなかに韜晦してしまい、旧稿そのものの姿はまったく遺されなかったと推察される。

彼は、この巻に後続する他の草稿にも、当然大幅な改訂増補をなし、また新稿を加えるつもりだったと推察されるが、その突然の死によって、他の巻の旧稿群は、改訂増補を加えられることなく遺された。こう考えると、『経済と社会』遺稿群の残存状況を整合的に理解できる。

IV 分岐点としての1913~14年

『社会経済学綱要』の遅延事情

『社会経済学綱要』の執筆予定者のひとりであるカール・ラートゲンとモール社との契約書によると、契約が締結された1910年5月23日の時点で、原稿締切は1912年1月15日とされていた（SBB/488/B5/M4: 552b）。しかし、カール・ビューヒャーの発病など、さまざまな事情で原稿は遅延し、とりわけヴェーバーとラートゲンの原稿が難渋したため、刊行計画は大幅な修正を余儀なくされる。その後、1914年9月5日付パウル・ジーベック（編集者）宛書簡中で、ラートゲンは次の事実を告げている。第一に、この年の初頭に、ラートゲンはヴェーバーに書簡を送り、そのなかで、この年の夏には『綱要』の原稿に集中して取りくむつもりだと書いた¹⁴⁾。第二に、しかし現下の状況（大戦の勃発）により、突然さまざまな任務に忙殺されるようになり、原稿に集中することは「まったく不可能（ganz unfähig）」になった（SBB/488/A360,2: 139a）。

こうした事情は、ヴェーバーにも共通していた。彼は、既述のように、「意見書」を補完す

るため、すでに書きためていた膨大な草稿の一部を『ロゴス』誌に掲載することにした。そしてこれを契機として、草稿の他の部分についても、そのつど『ロゴス』『社会科学・社会政策論叢』等の媒体によって公表し、読者の意見を聴きながら、『綱要』のための原稿をまとめるつもりだったのであろう。つまり、『ロゴス』誌に掲載された『理解社会学論』は、一方では「意見書」の補完物であり、他方では『綱要』の《パイロット版》としても位置づけられていたのである。ところが、ラートゲンと同様に、大戦勃発によって、彼の行動計画は大きく狂ってしまう。また、その計画変更は、大戦という外的要因によるだけではなく、すでに大戦勃発以前に、構想の変更がなされつつあったのかもしれない。以下に検討しよう。

1914年構成表の意味するもの

1914年6月2日付構成表は、大戦勃発直前に公表されており、そのなかのヴェーバー担当巻の構成(MWGI/24: 168f.)は、常識的に考えて、1913年末～1914年前半期の彼の構想を反映したものであろう。そして、彼は、『理解社会学論』を公刊したことをきっかけとして、まさにこの1913年から翌年にかけて(『理解社会学論』を仕上げたあとに)、1909/10～13年草稿群にかなりの加筆をなしたのではないかと推察する。その根拠は二つある。

ひとつは、前掲の『理解社会学論』脚注に、この草稿群を『経済と社会』に「供される手筈になっていた(dienen sollte)」¹⁵⁾と書かれていることである。この表現は、「手筈になっていたが、それは実現しない」という意を含んでおり、この論文を刊行した時点で、ヴェーバーは、この草稿群をそのまま『経済と社会』に掲載することを断念したことがわかる。

もうひとつは、1914年4月15日付ジーベック宛書簡中で、自分の原稿とラートゲンの原稿は、「いまなおずいぶんと(gründlich)待ってもら

わなくてはなりません」と述べていることである(MWGI/8: 623f.)。この記述は、ラートゲンのジーベック宛書簡(前掲)中の記述と符合する。当時一年間の予定で在米研修中だったラートゲンは、ハンブルク学術財団とハンブルク財界から支給された潤沢な旅費・研究費を用いて、アメリカ各地において精力的に調査旅行をおこない、パナマ運河の視察にも出かけており、後にその詳細な報告をまとめている¹⁶⁾。そのため『綱要』への寄稿が困難になっていることを、ヴェーバーは知っている。そしてヴェーバーは、自分の原稿も当分仕上がりそうにないことを吐露している。ラートゲンのみならず、ヴェーバーにも原稿遅滞が生じ、そのため締切が延ばされているという事情がみえる。

では、そうした難渋が生じた理由はなにかというと、『理解社会学論』執筆を機に、『経済と社会』の——とりわけ社会学的カテゴリー論にかんする部分の——構想を練りなおしたためと考えるのが自然である。1910年5月構成表にはなかった「社会的秩序のさまざまなカテゴリー(Kategorien der gesellschaftlichen Ordnungen)」が1914年構成表に出現しているのは、こうした事情からであろう。

1914年構成表は、まさにその構成表が公にされた時点で、すでにいくらか古くなりつつあったのかもしれない。つまり、このとき彼が加筆しつつある草稿群が、1914年構成表から逸脱しつつあった可能性はある。しかし、この作業は大戦勃発によって中断され、その後、今度は『世界宗教の経済倫理』の雑誌掲載のほうを先にすすめることにしたというのが、『経済と社会』『世界宗教の経済倫理』の執筆経緯だったのであろう。こう考えると、1914年構成表と、遺されている旧稿群の内容・構成とのあいだに、殊更に「ズレ」をみようとするのは無理であり、そのことは折原の労作においても合理的に説明されている。

V 『理解社会学論』とそれ以後

以上に見てきたように、『理解社会学論』は、社会政策学会への「意見書」の副産物であった。この事情を押さえていないと、これが大急ぎで調べられ、無理を押して『ロゴス』誌に掲載されることになったのはなぜかがわからない。また、『理解社会学論』は、そのときまでにヴェーバーが書きためていた旧稿への方法論的基礎論の全体ではない。そこから抜きだされて『理解社会学論』に流用されたのは三つの章のみであり、それは、方法論的基礎論の——おそらく——一部分である。1914年構成表に記されているのは「社会的秩序のさまざまなカテゴリー (Kategorien der gesellschaftlichen Ordnungen)」であって、これは『理解社会学論』(『理解社会学のいくつかのカテゴリーについて (Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie)』)に相当するものではない。それは、『理解社会学論』の第V～VII章を含む方法論的基礎論と、さらに他のさまざまな——「いくつかの (einig)」ではなくもっと多くの——カテゴリーをも含めて整理した大きな記述だと推察される。そして『理解社会学論』は、あくまでも「意見書」を補完するために必要なカテゴリー論のみを抜きだしたのだから、その第V～VII章が「社会的秩序のさまざまなカテゴリー」のなかの主要な部分だったと速断することもできない。ヴェーバーは、1914年1月に価値判断にかかわる持論を十全に展開するため、「意見書」を補完する討論材料として『理解社会学論』をまとめたのであって、この論文に『経済と社会』全体の方法論的基礎論を担わせるつもりで書いたのではない。『理解社会学論』の掲載誌は11月に刊行されており、当時すでに「抜刷」を作成する慣行があったので、社会政策学会討論会に参加を予定している会員にそれを送付したのではないと思われる。『理解社会学論』は、本来、あ

くまでも、こうした特殊な目的に資することのみを念頭に置いてまとめられた論文である。

しかしこれとともに、『理解社会学論』に付せられている前記の脚注の記述から判断すると、ヴェーバーは、この論文を『ロゴス』に掲載するさい、方法論的基礎論の他の部分も、さらに他のカテゴリー論も、同様に『ロゴス』『社会学・社会政策論叢』等の媒体に掲載し、識者の目に触れさせるのがいいのではないかと思いついたようである。肥大化した『経済と社会』草稿を、いまずぐ整理して完成させることはできそうにない。そこで彼は、たまたま特殊な事情でその一部を『理解社会学論』中に流用して『ロゴス』誌に掲載することになったのを機に、他の部分も順次雑誌上に公表し、最終的に『経済と社会』の完成稿へと導こうとしたのであろう。

ところが、彼は、『理解社会学論』公表のあと——また彼にとっては不本意な結果に終わった1914年1月5日の社会政策学会討論会¹⁷⁾のあと——、方法論的基礎論の構成を根本的に再考したと思われる。同時に、彼は、『経済と社会』の構想・視座にも重要な変更を加えようとしたとも思われる。彼は、討論会から半年ほど経った1914年6月21日付で、ゲオルク・フォン・ベロウに宛てて書簡を書き、そのなかで、「たぶんこの冬に、『社会科学綱要』[正確には『社会経済学綱要』]へのかかなり包括的な寄稿を印刷させはじめるでしょう」と述べている。それは、「政治諸団体の形態を比較しつつ体系的に取りあつかう」もので、たとえばヨーロッパ中世の都市と、他の時代の他の文化圏の都市とを比較し、そこに顕現している差異がなんに由来するのかを解明するもの、つまりその「特有のものを因果的に説明する」「予備研究」である。そして、この予備研究を提供するものが、ヴェーバーの理解する「社会学」なのであり、彼は、関連諸領域の専門家からの不興を買うであろうことを承知のうえで、あえてこの難事業に取りくもうとするのである¹⁸⁾(MWGII/8: 723f.)。彼は、

先の社会政策学会討論会において、価値選択・価値関係と科学との関連づけにかんする自分の主張が理解されなかったことを受け、このペロウ宛書簡の時点で、〈問題関心〉と〈社会理論・社会科学〉との関連づけの具体化事例として、『経済と社会』の構想を練りなおし、それを、〈比較社会学的視座からの予備研究〉として位置づけ、全面改稿しようとした模様である。

ところが、そうした予備研究のためには、さらにそれに先立って、さまざまな文化圏の宗教・社会・政治等にかんする具体的かつ包括的な比較研究が必要である。こう考えた彼は、この《予備研究のための予備研究》として、『世界宗教の経済倫理』にかんする詳細な研究に取りくむことにしたのであろう。そこで彼は、ペロウ宛書簡の時点では1914年冬と予告していた『経済と社会』刊行の段取りを変更し、まずこの比較宗教社会学研究を、1915年以降、順次『社会科学・社会政策論叢』誌上に公表し、また1913年の「意見書」を改訂し、『社会学系科学と経済学系科学の「価値自由」の意味』と題して『ロゴス』誌に掲載し(1917年)、さらにそこから派生して『職業としての学問』と『職業としての政治』を語り、この二つの講演録を1919年6月下旬～7月初に刊行し、なお加えてこれと同時期に、ミュンヘン大学で「社会学のもっとも一般的なカテゴリー」にかんする講義をなした¹⁹⁾(1919年夏学期)。これらの準備的著作群(および講義)を経て——それらの予備研究群によって——ようやく『経済と社会』新稿刊行の機が熟したのである。こう考えると——そしてこう考えたときにはじめて——1914年から1919年までの《長い空白》を理解できる。

ヴェーバーは、本稿中に紹介した書簡からもわかるように、他の編集者や他の執筆者に迷惑を及ぼすことを嫌っており、こうした深謀遠慮は、その生涯を通じて顕著に認められることである。それにもかかわらず、速筆をもって知られている彼が、『社会経済学綱要』の原稿を5

年間も放置し、そのためこの講座の完結に著しい遅延を招き、他の執筆者や出版社に多大な迷惑をかけている。それは、こうした問題を招きながらも、そこにどうしてもやむにやまれぬ事情が存在していたと考えなくてはならない。私見では、大戦勃発という外的事情だけでは、この「事情」を十分に説明することができないのである。

VI 今後の課題

本稿では、『経済と社会』と『理解社会学論』との関連、およびその他の著作との関連を解明するために必要な事実確認をおこなってきた。しかし、1914年の社会政策学会討論会から『経済と社会』執筆中断にいたるまでの経緯など、十分な考証ができなかった事項もあり、解明すべきことはなお数多く残されている。『マックス・ヴェーバー全集』の批判的摂取と、ヴェーバー関連遺稿集の調査によって、ひとつひとつヴェーバーを除去していく作業がなお必要である。

今後、全体を見渡すことができるようなかたちで、日本の読者にたいして、『経済と社会秩序・社会勢力』をどう提供するのかという大きな課題がある。折原の研究成果を批判的に摂取し、ヴェーバーによって仕上げられた原稿と、未完・未改訂のまま遺された原稿との関連と差異とを確認しつつ、その社会理論の射程を明示することは、われわれ自身の社会理論構築にも資することであろう。

注

- 1) マリアンネ・ヴェーバーによる編纂作業にさいして、この旧稿と新稿との《接合=齟齬》問題が非常に重大であったことは、水沼知一も指摘している(水沼知一 1981)。
- 2) 『理解社会学論』は、従来、ヨハネス・ヴィンケルマンが編纂した『科学論集』(とくに第三～六版)から引用されてきた(WL6: 427-474)。ところが、ヴィンケルマンは、『科学論集』

第三版において、収録されている各論文にたいして恣意的な改変をおこなっており、なかでも『職業としての学問』にたいする常軌を逸した改竄は看過できないものである。これにかんしては、拙著中の該当箇所において指摘している(野崎敏郎 2016)。『理解社会学論』にたいしても、彼はいくつかの箇所書き替えをおこなっている。これにたいして、現在刊行がすすめられている『全集』版は、ヴィンケルマンの《脚色》を排除し、原著者の元の版を再現する方針を採っている。『職業としての学問』を収録した既刊の第I部門第17巻にあっては、ヴィンケルマンによる改変は否定され、元に戻されている。『理解社会学論』が収録される第I部門第12巻も、この論文の初出時(雑誌『ロゴス』収録時)の姿が復元されるはずなので、本稿においても、引用はすべて『ロゴス』版からおこなう(Weber 1913: 253-294)。

3) 1912年11月に、社会政策学会会長グスタフ・シュモラーは、社会科学と価値判断の諸問題にかんして、学会メンバーの意見を聴取するとの「回状」を發し、寄せられた論稿は『意見集』(1913年)として印刷に付される。そして1914年1月5日に非公開の討論会が開かれる。

この『意見集』にヴェーバーが寄せた「意見書」(このときタイトルはつけられていなかった)は、後に改稿され、『社会学系科学と経済学系科学の「価値自由」の意味』と題され、『ロゴス』誌に掲載されることになる。

4) ある事象にかんして、特定の問題関心および観点からみたとき、その歴史的意義を評価することを「価値査定(Bewertung)」と呼ぶ。この「価値査定」のうち、そうした評価を評価者が内面化し、それを自己の思考規準・行動指針とするとき、それを「価値選択(Wertung)」と呼ぶ。たとえば、政治史におけるアナーキズムの意義を考察し、「価値査定」をなすのは、どのような立場の政治学者でも可能であり、それは、アナーキズムの立場に立って考え行動する「価値選択」とは別物である。

5) 一ボーゲンは16頁分の分量の紙を指す。したがって二~三ボーゲンは32~48頁分である。

6) ヴェーバーの書いた「意見書」を含む『意見集』は、後年ひとまとめにして公刊されている(Nau 1996)。これによって分量を確認すると、J・H・エプシュタイン4頁、F・オイレンブルク7頁、R・

ゴルトシャイト14頁、L・ハルトマン1頁、A・ヘッセ3頁、O・ノイラート3頁、K・オルデンベルク3頁、H・オンケン9頁、W・ロールベック3頁、J・シュンペーター2頁、O・シュパン9頁、E・シュブランガー25頁、L・ヴィーゼ7頁、R・ヴィルブラント7頁にたいして、ヴェーバーの「意見書」は40頁を占めており、その長さは突出している。

『意見集』のオリジナル版(ドイツ連邦公文書館ベルリン館所蔵)では、ヴェーバーの「意見書」は38頁分ある。彼は、この「意見書」の分量を、学会から指示された「二~三ボーゲン」(最大48頁)の範囲内になんとか抑えたのだが、すぐあとで指摘するように、この「意見書」だけでは討論資料として不十分だと考えたことが、『理解社会学論』執筆の直接の動機になる。

なお、ゴルトシャイト、オンケン、ヴェーバーの3編は、寄稿全体の題目を欠いている。

7) 『全集』版では、この丸カッコとすぐ次の丸カッコの位置が変更されているが、まったく不適切であり、ここでは原書箇の丸カッコ表記に従った(GStAPK/MW25: 78b)。この箇所を変更したことは『全集』版に注記されている(MWGH/8: 318)。

8) ここに記されているタイプ打ち原稿(一頁あたり540~550語)の分量を最大に見積もると、53頁分で2万9150語になり、これを一頁730語の雑誌に換算すると39.93頁になるので、ヴェーバーの計算は合っている。しかし、この見積もりはそれでもなお少なめだったようで、最終的に『ロゴス』誌に掲載された『理解社会学論』は42頁に達した。この増頁は、表題・章題・執筆者名を入れ、また章の変わり目で余白を必要としたためであろう。あるいは、掲載するさいに、彼がさらに加筆したためかもしれない。

折原は、『全集』版における丸カッコの改変(前注を参照)に惑わされたこともあって、この箇所の読解をしくじっており、「それぞれ540~550語の削除と書き入れ」がおこなわれたかのように(つまり「540~550語」の削除と「540~550語」の書き入れがあったかのように)解しているが(折原浩 2013: 42, 44頁)、そうではない。ヴェーバーは、タイプ打ち原稿に削除と加筆をおこない、この削除分と加筆分とを差し引きして51~53頁分だと見積もり、これにもとづいて、『ロゴス』に掲載した場合の分量を割

- りだしているのである。たとえば、おそらくマリアンネ夫人によって作成されたタイプ打ち原稿がかりに48頁あったとすると、そこにヴェーバーが肉筆でいくらかの削除と大量の加筆をおこなったことによって、だいたい3～5頁程度の増量になると彼は見積もったのである。
- 9) リッケルトは、ヴェーバー、クローナーらとともに、『ロゴス』誌の共同編集者である。
- 10) おそらく、かつて『ロゴス』誌の編集会議上で、ヴェーバーは、掲載論文の分量制限等について提案し、指示していたのであろう。その「指示内容 (Angaben)」を、彼自身が守らなくてはならないのである。
- 11) 完成稿の『理解社会学論』は、第I～IV章が約14頁、第V～VII章が約28頁だから、これを元のタイプ打ち原稿 (51～53頁分) に割りあてると、第I～IV章が約17～18頁、第V～VII章が約34～35頁となる。
- 12) 筆者は、この討論会へといたる経緯をしめす社会政策学会の内部資料を閲覧することができた。そしてこの経緯について詳論する必要を感じているが、紙幅の関係でここでは省く。「意見書」および『価値自由論』の成立過程については別途考証することになるだろう。その背景となる価値判断論争については拙著を参照 (野崎敏郎 2011: 第9章)。
- 13) ヴェーバーのこのあたりの記述は、どうみても読者にたいして不親切であり、彼の自己諒解 (独り合点) のもとで話がすすめられているという感がある。
- 14) ラートゲンのこのヴェーバー宛書簡の現物は発見されていない。
- 15) この sollte は、接続法第II式ではなく過去形だと判定する。
- 16) ラートゲンの在米研修中の活動をしめす資料は、ハンブルク州立公文書館に所蔵されている。この在米研修は、第一次世界大戦勃発によって中止され、彼は研修を切りあげて帰国せざるをえなくなった。
- 17) この討論会は、完全非公開で、当日配布された『意見集』も議事録も公刊されず、そもそも議事録をとることもなされなかった。しかし、後年フランツ・ベーゼがその討論の内容の一端を明らかにしており、そこには、ヴェーバーの主張がほとんどの参加者にまったく理解されなかったことが記されている (Boese 1939: 147f.)。

- 18) この書簡にたいして、ペロウは返書を送っており、これも興味深いものである。さらにペロウからの質問に答えて、ヴェーバーは再度書簡を返している。この一往復半の書簡は、ヴェーバーの歴史観・社会学観・大学観を知るうえでたいへん重要なものなので、拙著中にその主要部分を訳出しておいた (野崎敏郎 2011: 258-261頁)。
- 19) この講義内容にもとづいて、『経済と社会』新稿のカテゴリー論を組み立てたことは、前出の1919年6月28日付妻宛書簡中でヴェーバー自身が語っている (MWGII/10: 667, 野崎敏郎 2016: 420頁)。

未公刊史料一覧

- GStAPK/MW25: VI. Hauptabteilung, Nachlaß Max Weber. Nr. 25. Briefe von Max Weber an Rickert 1894-1920. Geheimes Staatsarchiv preußischer Kulturbesitz
- SBB/488/A360, 2: Nachl. 488, A360,2. 1914, Raa-Rau. Staatsbibliothek zu Berlin
- SBB/488/B5/M4: Nachl. 488, B.5, M.4. Staatsbibliothek zu Berlin

文献一覧

- Baumgarten, E. (Hrsg.) 1964: *Max Weber; Werk und Person*, Dokumente ausgewählt und kommentiert von E. Baumgarten. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- Boese, F. 1939: *Geschichte des Vereins für Sozialpolitik 1872-1932*. Berlin: Duncker & Humblot
- MWGI/24: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 2. Wirtschaft und Gesellschaft; Entstehungsgeschichte und Dokumente*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2009
- MWGII/8: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd. 8. Briefe 1913-1914*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1998
- MWGII/10: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd. 10. Briefe 1918-1920*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2012
- Nau, H. H. (Hrsg.) 1996: *Der Werturteilsstreit; die Äusserungen zur Werturteilsdiskussion im Ausschuss des Vereins für Sozialpolitik (1913)*. Marburg: Metropolis

Weber, M. 1913: Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie. *Logos; Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur*, Bd. IV, H. 3

WL6: Weber, M., *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 6., erneut durchgesehene Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1985

折原浩 2013『日独ヴェーバー論争——『経済と社会』(旧稿)全篇の読解による比較歴史社会学の再構築に向けて——』未来社

中野敏男 1990「〈解説〉理解社会学の綱領的な基礎として」海老原明夫・中野敏男訳『理解社会

学のカテゴリー』未来社

野崎敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会学者——』晃洋書房

野崎敏郎 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究(完全版)』晃洋書房

水沼知一 1981「マックス・ヴェーバー『経済と社会』編集史における若干の問題点——時期区分と問題の所在——(1)」東京都立大学『経済と経済学』46

(のざき としろう

佛教大学社会学部教授)